

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.138; おわりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008327

おわりに

上羽 陽子

(国立民族学博物館)

本書は2005年から2014年に国立民族学博物館（以下、民博）で開催された民博・日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員研修ワークショップ」の成果報告である。

「博学連携教員研修ワークショップ」は、学校教員、文化人類学者、博物館教育専門家、教育学者という異業種間の協働によって展開してきた、民博にとってはじめての本格的な博学連携の取り組みであった。

本書をとりまとめるにあたって、民博代表として上羽が各部のガイダンスを担当し、総括的な編集の役割を果たした。本ワークショップが異業種間の協働作業であったように、本書の編集も異なる立場からの意見を構築しながら作業が進められた。中牧は文化人類学および2005年に本ワークショップを民博で立ち上げた立場から、中山は小学校教諭の経験を持つ教育学の立場（2011年度から2014年度まで民博客員教授を務める）から、さらに本書は、日本国際理解教育学会との研究成果でもあるために、藤原は日本国際理解教育学会会長という立場から、森茂は教育学および本ワークショップを立ち上げるきっかけとなった民博共同研究の代表者という立場（2002年度から2005年度まで民博客員教授を務める）から、10年間の膨大な成果をどのように構成し、数多くの実践者のなかから執筆者を選定するか議論を重ね、本書の章立ておよび、集まった原稿へのコメントや修正作業などの編集作業に従事した。

編集会議でのディスカッションは刺激的であった。編者はそれぞれの専門が異なり、本ワークショップに関わってきた経緯や期間も異なることから、時に意見が交錯する場合もあった。しかし、そのような編集過程作業のなかでの議論を通じて10年間のワークショップの問題が建設的に提示され、その経験からディスカッションを座談会として記録することも考案された。

2002年の「総合的な学習の時間」の創設を契機に博物館と学校の連携が積極的に模索されるようになった。「総合的な学習の時間」のなかの学習課題の1つに「国際理解」がある。本書には「国際理解」を目的としたワークショップ実践についての報告が挙げられているが、ワークショップごとの性格や分類などを体系的にまとめるまでには達しておらず、現時点では問題提起のレベルにとどまっているといわざるをえない。しかし、その問題提起のなかには、博学連携を通じて「国際理解」を深めるために民博が取り組まなければならない課題が浮かび上がってきている。民博の研究者による長年のフィールドワークによる研究成果は、展示や標本資料、映像・音響資料、図書資料などを通じてアクセスすることが可能である。本書は、これら民博の研究資源を学校教育の現場に

においてどのように活用すべきかを問い直す契機ともいうべき報告書であり、今後の学校と博物館における「国際理解」の新たな研究分野の開拓につながることを望むものである。

最後に本書を刊行するにあたり、協力していただいた執筆者各位に感謝の意を表しておわりにしたい。